

青蛙亭滞在記

竹並 麻夕子

髪が逆だった。脳が沸騰するかと思った。自分は気が狂う、という恐怖が突然襲いかかってくる。外を歩いても不安でならない。電車に乗っても、棺桶に入れられたような気分になる。夜は一睡もできず、少しうとうとしかけたかと思ったら、暗い水底に引っ張られるような幻覚を見る。

ほうほうのていで、近くの脳病院へ行った。緑青色の鉄格子のついた窓が並び、そこから浴衣を着た男が演説していたり、妙な子守唄を歌う女の声が聞こえたりしているような所だが、この際仕方ない。病院の中は人氣がなく、なんだか墓地を思わせる陰気臭さが漂っていた。ホルマリンに漬けた薬液の匂いまでするような気がする。薄暗い待合室で待たされた後、黄色いカーテンが西日を遮っている診察室に通された。私の顔を見るや、医者は言った。

「神経衰弱ですよ、神経衰弱。あなたみたいな頭でつかちの人がよくかかる病気です」
失敬な事を言う医者もあったものだ。だが、しんどくてたまらないから、聞いた。
「先生、どうすればいいですか？」

医者は六十も過ぎかと思われる老齢で、丸っこい目や鼻が狸そっくりだった。彼の後ろには、茶色や紺色の薬瓶が収められた白い戸棚やドイツ語で書かれた医学書が並んだ書棚がピラミッドのように光り輝いていた。その威光を借りるみたいに、医者はそっくり返って託宣をたれた。

「しばらく仕事を休んで、静養することですな。別の土地へ行ってのんびりするの悪くないでしょう」

医者の所を辞して、考えた。この京都で帝大を出た後、西洋美術の研究やその学術書の翻訳を生業としてきたが、私がいなくて困るといふ仕事ではない。帝大出の学士といえは聞こえはよいが、実の所私の稼ぎだけでは不十分で、今だに名古屋の実家から仕送りを受けている始末だ。この昭和六年という時代には、もう『高等遊民』などという優雅な呼び名は通用しないだろう。そうした厄介者の私が名古屋へ帰るのも気がひける。ただでさえ、実家にはあまり仲の良い兄がいるのだ。

——どうしようか。

畳の上に寝転んで、天井を睨んでいると、ふいと名案が浮かんだ。いつか、九州に住む友人を訪ねて汽車に乗っていた時、車窓から青々とした田が広がるのどかな田園風景を見た記憶がある。水田も畦道も初夏の太陽を浴び、バルビゾン派の絵画から抜け出てきたような美しさだった。しばらくして停まった駅の名は「岡山」で、駅の前には眠ったような地方の町が広がっていた。背の低いビルディングがマッチ箱みたいに並び、間を臙脂色の路面電車がゆらりと通ってゆく。僻地というほど田舎でなく、カフェやビヤホールの看板も見えたような気がする。あそこは悪くない。

それに、確か岡山の隣には倉敷という町があり、昨年本格的な西洋美術館が開館したというじゃないか。そこで、泰西の名画を見たら、この頭がぐらぐらするような発作もおさまるかもしれない。

この考えは、すっかり私をその気にさせた。綺麗な芸妓が、しばしば通りかかるので気に入っていた祇園近くの下宿を引き払い、実家からは何のかんのと理由をつけて入用の金を送ってもらい、私は京都を後にした。頃は、春。円山公園には、夢幻の宴みたいに美しい桜が咲いていた。それを見ると、鼻の奥がフーンとくるような気がした。何だか、まるで都落ちでもするみたいじゃないか。

私は汽車から降りたつと、辺りを見回した。木造の駅舎は天井が高く、嵌め殺し式の西洋窓からは乳白色の光が差しこんでいる。ポツチイチエリとかいう伊太利亜の画家が、描いたかのような優しい乳色だ。田舎の駅にしては、ごったがえしていた。紐で結えて吊り下げた木箱の中に弁当を入れて売る男、煙管をくわえたまま、よたよた歩く恩給生活者らしい老人……種々雑多な人が行き交ってゆく。駅前には、人力車が何台も並び、プラットホームから降りた客は次々それに乗っていくらしい。人力車の黒い幌には、春の日が照っている。さきほど私の横を通り過ぎた若い女性の髪にも桜の花びらが美しい景色のようにっていた。まるで、三好達治の詩に出てくるような風情だ。

だが、私は多くの棒のように立ちつくしている。友人知人もまるでない土地。どこへいけばいいのやら。私にあるのは左腕にぶらさげた柳行李一つだ。最初の思いつきだけで、突進したことを悔やんだ。もっと、この土地のことを調べておくんだ。あたりをきよるきよる見回していると、車夫が聞いた。

「お客さん、どちらへ行かれるんですか？」

「いや、まだ決めてないんだ」

「それじゃ、そんなところへ立ってもらっちゃ困りますぜ。ここは、人力車乗り場でさあね」

車夫はじろりと私を睨み、その場から追い立てた。色の黒い屈強そうな男だから、とても歯の立つ相手じゃない。やむなく私は、駅舎の入り口に戻ろうとした。おかしな事が起こったのは、その時だ。

「もし、あんた」

突然そんな声と共に、私のセルの着物の袖がひかれたのだ。見ると髪をひつつめにした小柄な婆さんがこちらを見ていた。手に小豆色の信玄袋らしきものをさげている。

「さつきから見とおたんじゃが、あんた岡山ははじめてじゃろうが？」

「はい、そうです」

「やっぱりじゃな。それで、宿を探しておんじゃね？」

「いえ、宿じゃありません。住む所です」

そう言った時、婆さんの金壺眼の奥が光ったような気がした。

「そりゃあ、ぼっけえちようど良かったわ。実はいい家を知ってるんじゃ。きっと、あんたも氣に入るよ。さっ、行こうじゃないか」

こちらの腕をつかみとらんばかりの勢いである。

「ち、ちょっと、その家というのはどこにあるんです？」

「あいにく、ちょっと遠いんじゃよ。倉敷駅の近くさ。また少し電車に乗らにやいけんけど」

「倉敷……ですか」

こうなれば岡山も倉敷もそう変わりはないような気もした。妙な婆さんだが、ついていくのも面白そうだ。

私は婆さんに連れられて、また汽車に乗り直すと倉敷まで行った。車窓から見る風景は私の記憶にある通りだった。深い土の色が広がり、田では夫婦らしい男女が作業し、そばの畦道では小さな四、五歳の子供が犬を相手に遊んでいる。思わず笑みが漏れるような情景だった。

汽車がガタンと音をたてて停まると、婆さんはさっと歩きはじめた。年寄りの癖に恐ろしく足が速い。まるでアメンボが水面を這って歩くように、スイスイと前をゆく。駅舎を出ると、道が一本太い線みたいに伸びていて、ほどなく古式ゆかしい家並みが現れた。

「きれいな所ですね」

私は世辞ではなく言った。立ちならぶ家々はこぢんまりと小さいが、磨かれた硝子の戸に墨色の壁土、門前の大壺に投げこまれた紫の花々など目にしみるような美しさがある。家の前の道には打ち水がしてあり、水気を含んだ春の匂いが辺りに漂っていた。

「京都の町とは違った美しさがあります」

「あんたが住んどった所は千年の都かもしれないが、こっちも幕府が倒れちまう前は天領

じゃったんだから」

婆さんは面白くもなさそうに言ったが、間もなくその足がとまった。

「ここじゃ」

そこは竹藪を背にした陰気な一軒家だった。黒っぽい木造の外壁と白い障子のコントラストが際立ち、厳しい感じさせさせた。簡素な門柱に背の低い木戸があり、そこから踏み石がぽつんぽつんと続いている。玄関前には、黄色い糸水仙が幾株も咲いていて、そこだけ日があたったように明るく見える。

「三軒隣に大きな造り酒屋があるじゃろうが。そこが大家じゃから、頼んでみられえ」

案内してくれるかと思ったら、「そんならわしはここぞえ」と婆さんはスタスタと歩いていってしまった。ぽかんと見送っているうちに、アメンボ婆さんは蟻みたいに小さく遠ざかっていた。しまった、礼ぐらい言っておけばよかった。

造り酒屋の門には、見事な墨書で「立花酒造」と書かれている。白壁に黒い瓦をいたいた蔵が奥に幾つも見えたが、私は酒を商っているらしい手前の建物の木戸を開けた。入り口そばに、木製の窓口があり、その奥は事務所になっているらしかったが誰もいない。部屋の中央のテーブルの上には、ずらりと酒瓶が並び、その向こうには長い通路が続いている。

「ごめんください」

その呼びかけの声に、奥の暗がりから男が姿を見せた。四十歳くらいの壮年で、知識的なものを感じさせる好男子だった。

「この御主人にお会いしたいのですが」

「私が主人の立花です」

道理で、堂々とした様子をしている。

「この三軒向こうの家をお借りしたいのですが」

「失礼ですが、あなたは一体どういう方です？」

主人はそこで、腕組みしてみせたが、顔には面白がるような微笑が浮かんでいる。それにしても、立派な顔だった。すっと伸びた希臘式の鼻や引きしまった口元といい、彫刻にでもしたいような造作だ。私は思わず見とれながら、言った。

「緋村宗次郎という者です。京都の大学を出た後、西洋美術の研究や翻訳をやってきました」

「それで、こちらへはどうして？」

「しばらく静養する必要があるができて」

「なるほど」

何がなるほどののか、主人は得心がいったように何度もうなずいた。

「よろしい。お貸ししましょう。家財道具はそのままありますし、何も準備していただ

く必要ありませんよ」

主人は私に小さな鍵を手渡した。なぜか、真鍮の蛙の飾りが一緒にぶらさがっている。こうして、私は『青蛙亭』の借家人となった。

今、私は『青蛙亭』の畳の間に床をのべている。家の背後の竹藪が夜風にざわめくのが聞こえ、枕元の洋燈は薄暗い。私は、蒲団に包まれたまま、じっと天井を睨んでいた。天井板に、ほの明るい灯の影がゆらめき、木目を細かく見せている。竹藪がざわざわ鳴るのは聞こえるのに、しんとした静寂が感じられて、何とも知れぬ心細さが押し寄せてきた。初めての家、初めての夜。誰も知る人のない土地で、一人ぼっちで過ごしていると思った途端、心臓がバクバクと音を立てはじめた。これが起こるともう駄目だ。「もう死んでしまう」という訳のわからぬ恐怖がわきあがってきて、「わあ」と叫んで外の往来へ駆けだしてしまいたくなる。裸足で夜の道を突っ走り、墓場だろうが月だろうが、どこまでも走っていきたくなくなるのだ。

といっても狂人と思われたくない、というくらいの理性はある。私は髪を手でかきむしり、歯を食いしばってじっとしていた。やがて、神経の発作は静まり、脈も少しずつ落ち着いてくる。私はようやく体の力を抜き、ほっと息をついた。額に冷たい汗が浮いている。

「やれやれ」

独り言を言って、乱れた布団を直しながらこの因果な病を恨めしく思う。何年前か、文豪芥川龍之介が自殺したのも、神経衰弱のせいだった。新聞では、この文士の死を大々的に報じていたものだ。その写真で見る芥川の顔はやつれきって、骸骨の標本に薄い皮を張りつけただけのように見えた。勿論、私は芥川のような天才ではない。でも、同じ神経の病を患った者同士として、奇妙な親近感を感じるようになっていた。

突然、小用が足したくなって、私は立ちあがった。確か、この家の便所は台所の前の廊下を曲がった奥にあったはずだ。外の庭に面する独立した空間になっていて、個室を出ると板敷の間に立って、庭の手水鉢で手を洗うという凝った造りになっている。

だが、便所の前に立った私は思わず息を飲んだ。個室の扉には、小さな硝子が嵌め込まれているのだが、そこにオレンジ色の明かりが灯っている。そのまま呆然と立ちつくしていると、扉がパツと開き、女の子が出てきた。十歳かそこらに見え、朝顔の模様のついた浴衣を着ている。

女の子は私には目もくれず、暗い廊下をトントンと歩いていってしまった。

私はフーツと溜息をつき、胸に手をあてる。また、発作を起こすかと思ったら、そんなことはなかった。足の裏の板の廊下はひんやりとして、便所の灯は明々と点いている

——どうも、妙な気分だった。

それから、どうやって朝を迎えたか覚えていない。私は蒲団にくるまったまま考えていた。昨夜見た女の子は、私の思い違いだろうか？ いや、そんなはずはない。こんなにはっきりと、切り揃えられたおかつぱの髪や浴衣の柄が目には焼きついているのだから。しかし、便所を使う幽霊なんているのだろうか？ 朝食を取るのも忘れ、横になったままあれこれ考えていると、玄関口から声が聞こえてきた。

「緋村さん、緋村宗次郎さん。いらっしやいませんか？」

昨日会った立花酒造の主人の声だ。私はあわてて返事をする、手早く着替え、表に出た。セルの着物に袴という格好だが、これで十分だろう。

「おはようございます」

玄関に立った主人はにこやかに挨拶した。インバネスの下からは紬の着物がのぞき、グレーのソフト帽をかぶっている。足元はおろしたと思われる、真新しい下駄を履いていた。なかなかお洒落らしい。

「緋村さん、昨夜はよく眠れましたか？」

「実は……」

と言いかけて、黙った。昨夜の幽霊の事が口から出かかったのだが、ここで話すのは得策ではないと思ったのだ。どうせ、見間違いにされるだろうし、第一私の療養なるものの真の理由に気づいているらしい主人が、私の頭の具合を疑ったりしたら困る。

「ええ。おかげさまで」

言い直した私に主人は満足気に頷いた。

「あなたも、ここでお暮らしになる以上、毎日の食事の支度をする者が必要でしょう。失礼ながら、私の方で飯炊きの仕事をする女中を用意してきました」

そして、主人は戸口を開けると外に立っていたらしい女に声をかけた。だが、その女の顔を見たとき、私は呆気にとられてしまった。この家までの道案内をしてくれた婆さんなのだ。

「この女中の名は菊村泉といいます。先年までずっと、私の家で働いてくれていた者で、忠義者であることは保証しますよ」

私は婆さん——泉とかいう洒落た名前らしい——の顔をじっと見た。彼女は金壺眼を細めてこちらを見ていたが、何も言わない。どうやら素知らぬふりをするつもりらしい。よし、ならばこちらもだ。

「わかりました、御主人。泉さんに食事をつくっていただくことにします」

私は頭を下げた。主人は、ポンと手を打って、白い扇子を開いて見せた。それで、ばたばたと顔を仰いで、言う。

「さあ、話は決まりましたね。泉には、さっそく今日から働いてもらおうことにしましょう。」

料理の外に掃除もしてもらいます。それと、緋村さん。お疲れでしょうが、これから倉敷の町を歩いてみませんか？ 私がご案内します」

願ってもない。私はうなずいた。

「どうも、かさねがさねお世話になります」

主人と私は、泉婆さんを残したまま家を出た。外の往来はしんと静まりかえり、道の傍らには海棠や青桐が堂々とした幹や葉を見せている。桜はほとんど散っていたが、花びらが道に散りつもあり、何ともいえず贅沢な心持がした。

「花を踏みては同じく惜しむ少年の春」

主人が呟いた。

「えっ？」

驚いて顔をあげた私に、微笑しながら説明してくれる。

「能の『西行桜』の一節ですよ。御存知ありませんか？」

「いいえ」

「花が咲く間も人が少年である時期もほんのいつときだという意味です。私の少年時代も、だいぶ昔の事になってしまいました」

「はあ」

「あなたも、うかうかしてちゃいけません。人間、あつという間に年を取ります」

まだそれほどの年でもない主人に言われるのも妙な気分だったが、こうしてはいられない、と気が急いでもくる。私も何か立派な仕事をおこなけりゃならん。

「あなたは、確か西洋美術史を研究なさってるんですね。この倉敷には格好の場所があります。大原美術館ですよ。そこへ行ってみませんか？」

「ええ、前から行ってみたいと思っていたんです」

思わず声が弾んだ。だが、一つ気にかかる事もある。

「御主人は、私につきあってくださいるような暇はないんじゃないですか？」

「商売の取引や酒の品評会に出かける以外は読書三昧の日々ですよ。今日は暇なんです」

主人はニヤリと笑った。

「今度、あなたにうちの酒を飲ませてさしあげますよ」

大原美術館は小高い丘の上に建ったギリシアの神殿のようだった。淡い黄土色がかった花崗岩の円柱は優美なふくらみを見せながら、すつくと伸びている。これをコリント式というのか、それともイオニア式というのだったか。瘦せた石灰質の丘や、オリーブの木々や山羊の姿が見えないのが不思議なくらいだった。

そして来場者を迎え入れる木の扉は堂々たる構えで、外界の俗塵を拒んでいるかのような

趣があった。私は巴里にも羅馬にも行ったことはない。だが、この建物の格調高さは、あちらのものにも負けないのではないかと思われた。

中は薄暗く、古代の至聖所のように静まりかえっていた。石造りの建物は光を遮断するの
か、外とは別の空気が流れているようだし、主人と私の下駄の音が高く響いて驚かされるほ
どだった。だが、薄闇の中からほの見える絵画は実に実に素晴らしい。

モノの水連は鉛色を帯びた水の中で、静かにまどろんでいたし、宝石だらけの衣装を着た
古代の女王を描いたギュスターヴ・モローの絵は、それ自体が絢爛たる輝きを放っていた。
しかし、私が一番惹きつけられたのはゴーギャンの「かぐわしき大地」だった。

画面には、褐色の肌の女が裸で立ち、こちらを睨みつけている。女の目は黒く、髪も黒い。
背景に広がるのははるか南方の島の風物だ。力強い色彩で描かれた絵からは、南海の光と風
がきらめいているような気さえする。女の強い目の光やどっしりとした肉の付き具合に見惚
れていると、主人が話しかけてきた。

「緋村さん、この絵が気に入ったようですね」

「ええ」

「私も、この作品は好きですよ。この女の体つきは、まるで木みたいにがっしりしてますね。
さわったら、なめし皮みたいに弾力があるだろうなあ。日本の女の、変に水っぽい中途半端
な体つきとは全然違います」

私は呆れて、主人の顔を見た。端正なインテリかと思えば、これも妙な男だ。

「これは、タヒチの女ですからね」

「外国の女はいいですね。何より豊満です。西洋の絵画を見ると、我々日本人の体はまだま
だ貧弱だと感じますよ」

どうも、この男、西洋絵画を真面目に鑑賞する気はないらしい。

美術館を出ると、もう昼時だった。私は主人に礼を言って別れ、しばらく倉敷川のそばを
散歩した。

「青蛙亭」に帰りつくと、玄関を開けたとたん、うまそうな匂いが漂った。うん、これは
炊きたての御飯と味噌汁の匂いだ。泉婆さんが昼食を作ってくれたらしい。

「ただいま」

私は声をかけ、畳の間が上がっていった。言い忘れていたが、この家は二階建てで、一階
は玄関の横に客間と畳の間と台所、二階に六畳の部屋が二つあるという間取りだ。初めて来
た時は気づかなかったが、庭の池のそばに御影石でできた蛙の置物がある。それなら何とい
うこともないのだが、この蛙は胸に酒瓶をぶらさげている趣向だ。信楽焼の狸の真似だろう
か。

卓袱台の前に腰を下ろすと、御飯に豆腐と揚げの味噌汁、筑前煮が運ばれてくる。

「もう帰ってくる頃じゃと、思うとりましたで」

泉婆さんは茶を湯呑みに注いでくれた。

「あんた、立花の主人に色々案内してもらおうたんじゃろう。どうじゃったね？」

「うん、良かったよ。美術館も凄かったが、街並みも風情があるね。なまこ壁に濃い影が落ちていたり、格子戸の奥の庭がきれいに掃き清められていたりして、思わず見入ってしまった」

私はそこで言葉を切って、飯を口にしました。うまかった。味噌汁もだしがよくきいていたし、人参や牛蒡などの根菜類にもうまみが溶け込んで、舌にしみるような美味しさだった。

「うまい、うまい」

そう言いながら、次々たいらげる私を満足そうに見ていた婆さんが、こちらの年を聞く。

「二十七歳だ」

答えると、こんな事を言いだしたから驚いた。

「そりゃ、嫁さんをもらうに格好の年ですなあ」

「まだ早いよ」

「いやいや。わしにいい当てがありますがな。緋村さん、ぜひわしの言う通り、嫁さんをもらいなんせえ」

「いや、それはご免こうむるよ」

家を紹介されただけでなく、嫁さんまで連れてこられてはたまらない。私は話題を変えることにした。

「婆さ……泉さんの御家族は？」

「連れ合いはずっと前に死んじまいました。せがれも一人いたんじやが、先の日露戦争で戦死してしもうた」

「そりゃ、苦労したんだね」

思わず知らず、しんみりした声音になった。

「それで、今は一人なのかい？」

「はい。でも、この年になりや、この世とあの世の境もはっきりしねえくらいじゃから、一人でも淋しいとは思いませんがなあ」

泉婆さんはそう言った後、声を潜めて続けた。

「ところで、あんた、この家で何か変わったことを見聞きなさらんかったかなあ？」

「えっ？」

私は思わずその顔を見た。泉婆さんは真面目くさって、こちらをのぞきこんでいる。

「それは、幽霊とかお化けという意味かい？」

——この家は元々幽霊屋敷として有名なのかもしれぬ。

そう思って聞いたのだが、彼女は何も答えず、ただニイツと笑った。口がピンと横に引つ

張られ、渋紙色の皮膚が一層皺だらけになった。

最後の飯粒を口に入れた後、私は食後決まって飲む紅茶を淹れようと湯を沸かしはじめた。後ろの婆さんが気になるので、そっと横目で窺う。と、呆れたことに婆さんは入れ歯を外し、それを湯呑みで洗っていた。口元はぺたんくと落ちくぼみ、唇とその周りの皺が、磯巾着のようにグニユグニユと動いている——ああ、気持ち悪い。

私はなるたけ見ないようにして、紅茶を入れたポットとティーカップを盆に載せ、二階への階段を上がって行った。

一週間ばかりたつと、すっかりこの家が気に入ってしまった。慣れてしまうと、なかなか住み心地の良い家だということがわかった。京都の友人に頼んで、向こうの下宿に置いてあった衣類や書籍（これらが、私の全財産なのだ）を送ってもらうと、「青蛙亭」はますます我が家という感じになった。「青蛙亭」といえば、よく仔細に見ると、襖の引き手にも蛙のデザインが施されていたし、洋燈の台の部分にも可愛い蛙の彫り物がついている。

「どうして、この家を『青蛙亭』って言うんだい？ 蛙のものもいっぱいあるし」
私が問うと、泉婆さんはこう言ったものだ。

「立花の家では、蛙が生き神さんなんじゃよ。何代か前の主が、或る晩寝とおったら、何百匹もの蛙が庭に集まって鳴いとったそうじゃ。それが幾晩も続くんで、不思議に思ってた蛙たちのおった場所を掘ってみたら、美味しい酒がわいてきたんじゃてえ」

馬鹿らしい。養老の滝じゃあるまいし。酒は杜氏がつくるに決まっている。

さて、私がいつも勉強しているのは、二階の六畳間だ。右側の部屋は寢室に使っている。その夜も、私はノートにペンを走らせていた。机の上の洋燈が障子の上に柔らかな影を落としている。今月末までに、大学の研究室から頼まれた論文を訳しておかなければならない。ロゼッティやミレーの絵画についてのものだ。しばらく調べ物に夢中になっていたから、その声が聞こえた時は飛び上がるほど驚いた。

「ねえ、何してるの？」

声の主は、この間の女の子だった。やっぱり朝顔の柄の浴衣を着ている。今時分では、まだ肌寒いだろう。

「ご覧の通りさ」

私は机の上を指し示した。

「僕は、勉強している」

「何の勉強？」

女の子はさらにこちらに近寄ってきた。小さな顔は可愛いすが、鼻が低く、目の間が離れている様子はヒラメに似ていないこともない。手足はマッチ棒のように細かった。

「西洋の絵や彫刻についてだよ」

私は少し、どきまぎししながら答えた。怖いとは思わないが、幽霊と話すのは妙な気分だ。「きれいな絵ね」

彼女は、机の上の画集を覗き込むと言った。伊太利のルネサンス時代の宗教画が美しい印刷で載っている。

「何百年も昔、イタリアという国で描かれた絵だよ。キリストという神様とそれにまつわる物語を表現しているんだ」

説明した後、私は女の子の方に向き直った。

「君は誰？」

「あたしは、桃子」

「どうして、ここにいるの？」

「だって、ここはあたしの家」

「えっ、そうなの」

「あなたが引越して来た時から、ずっと様子を窺っていたの。あなたも、ここに住むのね？」

桃子は——女の子というよりこう呼ぶことにしようと思つた——嬉しそうに言った。まるで、長い間探し求めていた仲間をやつと見つけたというように。

「うん、そうだよ」

「それで、ずうっと、ここにいるの？」

「いや、しばらくの間いるだけさ」

それを聞いた途端、彼女の顔は雨雲の影に覆われてしまった。

「それじゃ、あたしはまた一人ぼっちになるのね」

「そんなことはないさ」

私はあわてて言った。小さな子供を泣かせるなんて、真つ平御免だ。

だが泣きだすかと思つた桃子は、すぐケロッとした様子で、机の上に置いていた夜食のクッキーを「美味しそうね」といって手に取り食べてしまった。京都の洋菓子屋で買った高級クッキーも惜しかったが、それ以上に私は呆気に取られた。幽霊がものを食べるなんて驚きだ。桃子は遠慮もせず、皿に入っていたクッキーをあらかじめ食べてしまった。

「まあまあね」

桃子は指をなめながら言つてのけた。

「あたし、もっとバターがたっぷり入ったやつが好き」

「そりゃ、すみませんね」

「あなたのお菓子食べちゃったわね。あたし、もともと甘いものに目がなくて、お母さんはお菓子を入れた台所の戸棚に鍵をかけたたりしたものなの。あたしが盗み食いできないように」「へえ。どんなお菓子食べてたの？」

君が生きていた時、と続けそうになって慌てた。

「カステラとか大福餅とかそんなものよ。労研饅頭なんてのもあったわ」

「ろうけん……?」

「岡山だけでつくられてるお菓子よ。蒸しパンみたいな味がするの」

「ふうん」

はじめて聞いた。

気づくと桃子は真剣な様子で、西洋画の画集をのぞきこんでいる。小鳥に説教する聖フランチェスコが描かれたフレスコ画の頁だ。そのまま、じっと見ていたと思ったら、突然吠えるように叫んだ。

「あたしも絵を描くのが好きだったわ」

そして続けて、まくしたてた。

「すぐく上手だって、何度も褒められたの。小学校の廊下にも、紙の花飾りをつけて張りだされたし、賞状も沢山もらったわ」

「どんな絵を描くのが好きだったの?」

「仔犬とか鳥とか花とか何でもよ。でも、やっぱり生き物を描くのが一番好きだったの」

彼女は嬉しそうに笑った。前歯の間が少し開いて、八重歯が小さく光っている。この子が生きて、この世にあった時を思い、私は胸が痛むのを感じた。

窓の外では、風が木々の葉を揺らす音が聞こえてくる。春の終りも、もう近い。

それから毎夜、桃子はやって来た。泉婆さんが夕飯の支度をして、夕方六時頃家に帰ってしまうと、「青蛙亭」は私一人になる。外国の原書を広げ、うんうん唸りながら翻訳作業をしていると、おかつぱ頭の影がノートの上に落ちていたりする。

「どうして、夜だけ現れるの?」

私は聞いたことがある。

「昼はずっと眠っているの。よくわからないけれど、暗い納戸みたいなところでね。そこで、繭にくるまってるみたいで、うつらうつらしてるわけ。でも、パッと突然明るい通路が開ける時があって、あたしはその通路を通ってくるの」

「どうやら、この世とあの世の通路らしい。」

桃子は、私の研究する西洋の絵画にいたく興味があるらしく、熱心に本の頁を繰ったかと思うと、「あたしも描く」と鉛筆を手にとろうとした。だが、いかんせん、生身の人間でない者に物を握ることは無理らしい。鉛筆は彼女の指を素通りしてしまう。

「あたしだって、描けるのに」

桃子は悔しがり、こんなことも言った。

「今まで、あたしが上手に描いた絵をお母さんたちが大切にしまっていてあるはずなの。それをあなたにも見せたいのに」

「それは、どこにあるの？」

「さあ、わからないわ。あなたが探して」

そんな事言われても困る。

だが、桃子の御蔭でもないだろうが、私の研究は着実に進んでいった。毎日のように大原美術館に行き、絵を鑑賞する。日本画が静止した美だとするなら、西洋のそれは狂暴な衝動を内に孕んでいるような気がする。岩絵の具の静謐な色調と違って、油絵具の輝く色彩がそんな感じを抱かせるのだろうか。

この美術館の所蔵作品は、大原孫三郎氏の意向にそって、児島虎次郎という画家が欧州で集めてきたものだという。大変な眼力を備えた人物もあったものだ。

そうやって、かれこれ一月ばかりたった。五月の初め、私は家賃を持って「立花酒造」を訪れた。

店の硝子戸を開けると、頬の赤い田舎田舎した娘が出てきた。女中らしい。

「緋村です。来月の家賃を持ってきました」

声を掛けると、

「あい、すみません。ちょっとお待ちを」

と女中は奥に駆けこんでいった。五、六分ばかり待つと、主人が現れた。

「やあ、緋村君か。中に入って一服していきたまえ」

気のせいか、ぐっとくだけた口調になっている。私は言われるまま、彼の後について行った。造り酒屋の店の奥に、うなぎの寝床の様な通路があつて、そのさらに奥に主人家族の住まう家の玄関がある、というややこしい造りだ。

私は玄関の三和土に下駄を脱ぎ、家に入っていたが、立花家の家具調度の立派さには目を見張った。玄関からL字形に続く廊下の先に客間があるが、そこにピアノが置いてある。どっしりとした中国風絨毯が敷かれ、隅の飾り棚には薩摩の切り子や清水焼の壺が並べられているといった風で、なんとというかハイカラな感じがする。私の郷里の家も、土地ではちょっとした素封家だが、こんな華やかさはない。

「さあ、座ってください」

主人は、鳶模様の刺繍されたソファを指さした。

「君とはまた話したい、とずっと思ってたんだ」

「それは、どうも」

「青蛙亭の住み心地はどうですか？」

「ええ、結構です」

私は答えたが、気になっていた事を聞くのにはいい機会だと思ひ尋ねることにした。

「どうして、あの家を青蛙亭というんです？ 泉さんに聞いたら、蛙が酒の出る場所を教えてくださいましたからだ、などと書いていましたか」

「もちろん、そんなことあるものか」

主人は笑って、手をふった。

「青蛙亭というのはだね、岡本綺堂の小説『青蛙堂鬼談』から取っているんだ。これは一種の怪談なんだが、僕の祖父も怪談の好きな男だった。それで、あの家を青蛙亭と名付けて、百物語とか趣向をこらした会をもっていた訳さ。会に集まった者が、それぞれ怪談を披露するというやり方でね」

「はあ」

暇人もあったものだ。そのような名を付けるから、桃子のような幽霊が現れるのではない。私はちよつと呆れて、ソファに深く座りこんだ。

その時になって、突然私は部屋に漂う匂いを意識した。この家に入った時から、それは私の鼻を刺激していたはずなのだが、調度品の豪華さに注意を奪われて、それと気づかなかつたのだ。

「どこかで、甘い匂いがしますね」

「ああ、これは酒の匂いだよ」

主人は事もなげに言った。

「酒？」

「冬の間、杜氏達が蔵の中でつくりあげた酒が、瓶詰めされているところさ。これから、今年の新酒が店先に出るんだが、酒造りは神経を使う仕事だよ。その年によって、どうしても味の良し悪しができるし、第一腐造を起こしたら元も子もない」

「腐造って、何ですか？」

「酒のもろみが発酵途中で、腐ってしまうことさ……そうだ。君に、うちの酒を飲ませたいと言ってたね。ちよつと待ってくれ」

主人は部屋を出ていったが、すぐ大きな酒瓶とぐい呑みを持ってきた。

「これがうちの蔵で造った大吟醸『古備国』だ。飲んでみて下さい」

底に龍の目の様な模様のあるぐい呑みに酒が注がれ、私は口に運んだ。日本酒にありがちなくどい甘さがなく、まるで果物のような芳香が舌の上に広がった。桃か梨を思わせる芳醇さだ。

「やあ、これはうまいです。僕はあまり飲めない口なんです、美味しくいただけです」

本当は洋酒も日本酒もからきし駄目で、紅茶ばかり飲んでいるとは言わずにおいた。

「原料の米を精米機で磨きに磨いたら、実にうまい酒ができます。だが、その時米の大きさは元の半分以下になっています。大吟醸というのは、それだけ贅沢なものですよ」

「それは、確かに」

「東北の方では凶作が続く、大勢の娘たちが身売りされていると聞きます。東京には、それらの娘たちが沢山送りこまれるそうですよ。そんな時代に、いくらうまい酒をつくるためとはいえ、米を無駄使いして良いものか……正直言って、罪を犯しているような気分です」
主人は話続けた。

「備前の方では、そんな小手先の技術を使わず、米と水のうまさだけで勝負している酒造家が幾らもいます。その方がなんぼかましかもしれません」

私は黙ってぐい呑みを飲み干し、庭を見た。客間は中庭に面しており、深い苔の褥の上に楓の木が葉を広げている。左隅には蹲があり、口の形の周囲に「我唯足知」の文字が刻まれ、竹の注ぎ口から水が流れていた。

「いい庭ですね」

私は言った。こんなところで、風に吹かれながら読書できるとは、主人も幸せ者だ。

「ああ、ありがとう。それより君は、家にこもって文章を書いたり、本を読んだりしてばかり居るんでしょう？ 真面目くさった本ばかり読んでいたら、つまらん理屈屋になってしまいますよ。たまには、こんなものも読んでみたらいいですね」

主人は、飾り棚の引き出しを開けると二、三冊本を取り出した。どちらの本もおどろおどろしい絵が表紙に描かれている。黒眼鏡にマスクをした異様な男の顔とか、真っ赤な部屋に真っ赤な服を着て横たわっている美女の姿とか。

「江戸川乱歩ですよ。探偵小説というものを本邦で初めて編み出した男ですが、読みだしたら、こたえられません」

なんだかわからないが、有難く拝借することにした。

その後、主人は二階に案内してくれた。階段を上がりきった所に、大きな円窓が嵌め込まれていて、そこからは倉敷の町が一望に見渡せた。家々の黒い瓦屋根が打ち寄せる波のように、あるいは巨大な魚類の鱗のように、びっしりとひきめきあっている。その瓦の一つ一つに、日の光が照り渡っているのを見ると、遠い潮騒が耳の奥で轟くような気がした。

「立花酒造」の主人は私がほとんど外出しないと決めつけていたが、私だつて散歩ぐらいする。夕暮れの風が吹く頃、倉敷川べりを歩くのは、「哲学の道」を歩くのに匹敵する気持ち良さだ。

その日、私は小腹がへっていたので、紡績工場そばのパン屋へ入った。間口二間ぐらいしかないような狭い店で、ガラスケースの中に館パンや角食パンなどを並べている。ちょっと変わった感じの蒸しパンみたいなものがあったので、覗き込んでみると「労研饅頭」と説明書きがされている。これが桃子の言っていたものか、と思ったが何だかプロレタリアート風のネーミングなので手を伸ばす気になれない。やはり、館パンにするか、と迷っていると、

店主が話しかけてきた。

「お客さんは、ひょっとして『青蛙亭』を借りられた方じゃありませんか？」

「そうだよ」

「よくあんな気味悪い家を借りる気になりましたねえ」

私は驚いて店主の顔を見た。五十を出たくらいの中年で、よく日焼けした顔といい、濃い眉といい、パン屋というより百姓親父みたいな風体だ。

「気味悪いって……」

「あの家には、誰も住んでいなかったはずなのに、夜中に電燈が灯っていたりするんですよ。それも一度や二度じゃない。わしが夜中に便所に立った時など、あの家の厠にも灯が点っていたりする。背中がぞくりとして、出かけたものもひっこみましたぜ」

パン屋は私の顔を窺うようにして続けた。抜け目のなさそうな目を光らせている。

「大体、あの家は験の良くねえ家なのさ。今から何十年前になるかねえ、立花酒造の主人の末の妹だったのが小児結核だとかで、あの家に住んでいたのさ。結核が移ってはいけなやかで、家族から離れてね」

「その子は一体、どうなったんです？」

「そりゃ、死んださ」

私は呆然とした。それは、あの桃子ではないだろうか。

「まあ、そういう事があって、たまにあの家を借りようとする者もすぐ逃げてしまう。何か気味悪いことがあるのかねえ」

浴衣を着た子供が出るくらいならどうということはない、と思っただけで驚いた。私の方が当たり前でない神経になっているのかもしれない。

「だから、お客さんが『青蛙亭』に平気な顔で住んでおられるので、びっくりしたんで。ここだけの話ですが、『立花酒造』の者は代々変わり者でね。わしも、あの主人と顔をあわせると、世間の通りいっぺんの事が通用しないような変な気分になりますぜ」

私は、そのままパン屋を出た。気づくと、餡パンを買うのを忘れていた。だが、店に引き返す気にもなれず、そのまま『青蛙亭』に戻った。

玄関を上がると、奥の台所で泉婆さんがごとごと鍋を煮込んでいる。肉と野菜の入り混じったいい匂いがしたが、わたしはかまわず婆さんの背中に話かけた。

「泉さん、妙な事を聞いたんだが」

「はい、なんでござえますか？」

「実は近所の者と話していたら、この家には幽霊が出るなどと言ったんだ」

「幽霊？」

振り向いた泉婆さんの顔は、いつものように泥団子をこねてつくったような具合で、何の表情も浮かんでいない。

「この家に越して来た時、便所に灯りが点いているのを見た。そして、小さな女の子がそこから出てきた。その子は桃子って名前だが、気づくと毎晩、僕の所に遊びにやって来るんだ」
そこまで言って、私は一気に続けた。

「知らん顔しているが、泉さん、あなた、その子について何か知ってるんじゃないだろうか？
今気づいて怖くなったんだが、その子は僕をとり殺す気じゃないかね？」

「そんな阿呆なこと」

婆さんは心底馬鹿らしいという顔つきだった。

「桃子お嬢さんは『立花酒造』の御主人の年の離れた妹さんじゃ。可哀そうに、胸に病があったせいで、この家に御家族と離れて住んでおられたんじゃないがのう。桃子お嬢さんの世話をしたんが、その時立花家で女中を勤めとったわしじゃったという訳よ」

「なるほど」

私は頷いた。

「だが、まだわからないことがある。あなたはその子が、この家にいることを知ってたのかい？ 知ってたのなら、なぜ僕をこの家に呼んだんだい？」

「あんたが駅にポツンと立っとなるのを見た時、この人なら桃子お嬢さんの話し相手になれそうじゃと思たんでねえ」

私は呆然として、婆さんの顔を見た。神経の病を癒すためだと思つての暮らしが幽霊の相手をさせられていたことになる。

「今までの人は、この『青蛙亭』の雰囲気があわなんだようじゃがねえ。桃子お嬢さんが淋しい思いをしないよう、せっかく連れてきても、すぐ逃げてしまつたもんじゃ。でも、あなたにや、この家が似合うとるようようにお見受けしますよう」

確かに、そうかもしれない。あの頭の中を嵐が荒れ狂うような発作も絶えてなくなつてい

る。
「あんたは、この家に呼ばれてきたんじゃよ。家というのは、主人を選ぶんさあ」

婆さんはおごそかに言うと、私の前であるのもかまわず、入れ歯をパツカリ外して、コップの水につけた。

翌日、私は『立花酒造』を訪れた。店の戸を開けると、この間の女中が出てきて、すぐ主人に取りついでくれた。

「やあ、緋村君。どうしたんです？」

主人は、白い麻の着物に山吹色の帯を巻いた格好で出て来た。

「御主人、あなたは知らないようだが、『青蛙亭』は幽霊が出ると噂されていて、事実小さな女の子の霊が現れるんです」

私はそこでいったん黙って、また口を開いた。

「名前は桃子といいます」

その時、主人の顔に浮かんだ激しい驚愕の表情は、何ともいえないものだった。

「桃子が……。だが、妹ならもう二十年前に死んだはずですよ」

「だが、なぜかあの家に居るんです」

「それで、妹は、どんな様子です？」

「たあいもない話を楽しそうにしていますよ……子供らしい事ばかりをね。それで、聞きたいんですが、桃子さんが描いた絵というものが残っていませんか？」

「絵ですか……」

思いもかけないことを聞いたというように、主人は首をかしげたが、やがて大きな微笑が口元に漂った。

「そうでした。あの子は絵が得意で、しょっちゅう描いていたものです。桃子が死んだ後、両親はできの良いものを集めて屏風にしたんですよ」

そう言うと、主人は私を手招きして、蔵の並ぶ庭先に連れていった。酒蔵から離れた所に小さな土蔵があり、その扉を開けた。そして、長持ちやら、古い家財道具やらの積み重ねられた中から、何かを引っ張り出してくる。大きな衝立のように見えたが、左に結えた紐をほどくと、アコーディオンのようにぱらりと横に広がった。畳三枚分はありそうな、堂々たるものだった。

「これは……」

私は次の句が告げずに、黙ったまま、その大きな屏風を眺めていた。

子供が描いたと思われる写生図が幾枚も並べられ、丁寧に張り付けてあった。「大正元年尋常小学校四年 立花桃子」とたどたどしい字で横に小さく書かれ、仔犬や猫、朝顔の花の絵が生き生きと彩色されている。動物たちの目はこちらをまっすぐ見ているかのようで、花を揺らす風も感じとれそうだった。

私は、絵画の専門家だけれど、その事を抜きにしても、これらの絵には心を打つ素材さがあった。

「いい絵ですね」

やっと私がそう言うと、主人は頷いた。

「妹のことを懐かしく思い出しました」

私たちはしばらく黙ったまま、その屏風を見つめていた。初夏の透き通った光が、あたり一面に降りそそいでいる。

ここにるのが不思議に心地良い。桃子は相変わらず、毎晩のように遊びに来る。『立花酒造』の主人のお陰で、おかしな趣味の道にも入ってしまったが、それも面白い。ただ、泉婆さんが「そろそろ嫁さんはどうなら？」というのには閉口するのだが。

何だが、このまま一生過ぎてしまいそうである。

(了)